

ハンガリーのエトウエシ・ロラーンド大学における

集中講義を終えて

ロバート F. ローズ

二〇一〇年三月五日から二二日まで、ハンガリーの首都ブダペストにあるエトウエシ・ロラーンド大学 (Eötvös Loránd University 以下 E L T E と略す) 東アジア学科に招聘され、日本仏教について二週間の集中講義を行う機会を得た。数年前、E L T E で仏教学を担当しているハマル・イムレ (Hamar Imre) 教授が大谷大学で一年間過こされたい縁もあり、また当時 E L T E 日本語学科主任の山地征典教授のお力添もを得て、二〇〇六年に大谷大学と E L T E との学術交流協定を締結することができた。協定締結の際には、E L T E の Hudzecz 学長 (当時) が京都に來られ、さらに二〇〇九年には、当時大谷大学学長であった木村宣彰先生も E L T E を表敬訪問している。今回の集中講義はこの学術協定に基づいた交流の一環として行われたものである。以下今回の訪問について簡単に報告しておきたい。

—

三月五日の朝十時三十分、ルフトハンザの七四一便に乗り、関西空港からフランクフルトへと旅立った。最終目的地は E L T E 所在地であるハンガリーの首都ブダペスト。残念ながらブダペストへは日本からの直行便はなく、フラ



ELTE の校内

ンクフルト経由で向かうのが最も便利な方法である。約十時間のフライトの後、フランクフルト空港で乗り換え、現地の夜八時過ぎにブダペストに到着した。空港にはハマル教授が出迎えに来てくれていた。(ちなみにハンガリー語では日本語と同様に、人の名前は姓・名の順で記載される。) さっそく教授の新品の日本車に荷物を載せ、宿舎のホテル・ペ

ルニグリウス (Hotel Perrignius) へと直行した。長旅の疲れのため、すぐにベッドに転がりこみ深い眠りについてしまった。

ハンガリーの気温は、年間を通してあまり日本とは違いがなく、心配していたほどは寒くなかった。とはいっても、今年のヨーロッパは一月から二月にかけて、例年にはない寒波に襲われていて、フランクフルトからブダペストへ向う飛行機から下を見ると、地面には雪が多く残っているのが見受けられた。さらにブダペストに到着した翌々日は朝からか雪が強く降り、「ドナウの真珠」と謳われる街は真っ白に変身し、美しさをさらに増すこととなった。結局、私の滞在中、雪の日が四・五日あったが、会う人は皆「こんなことは十数年ぶりだ」と、驚きを隠せなかった。

さて、ELTEは一六三五年に創立されたハンガリー最古の大学であり、現在三万人以上の学生数を誇っている。大学の本部キャンパスはブダペストの中央にあり、敷地内には重



授業風景

厚で歴史の重みを感じさせる校舎が並んでいる。正門から少し入ったところには、大学の名前の由来になった物理学者エトウエシ・ローランド（一八四八―一九一九）の像も立っている。その像の前を通りキャンパスの奥に行くと、左には日本語学科のある建物があり、さらに奥に行くと東洋学科のある美しいレンガ作りのF棟がある。私が講義を行ったのが、この教室棟の三階の大講義室であった。（ちなみに、この教室には、教壇と学生の席の間に鉄製のフェンスが設置されていた。これは決して教授を学生から守るためのものではなく、以前この教室は科学の実験を行うために使われていたため、教員と学生を仕切るために設けられていたものであると聞き、安心した。）

周知の通り、ハンガリーは長い東洋学、特に中央アジア研究の伝統を持つ。ハンガリー人の祖先である遊牧民は、九世紀末にアジアから今の地に到達したため、多くのハンガリー人はアジア（特に中央アジア）に関心を持っているようで、このような関心からアジア研究が盛んであると聞く。チベット研究の草分け的存在であったチヨマ・ド・ケレス（Alexander Csoma de Kőrös 1784-1842）はハンガリー人であったし、敦煌文書の発見で有名な探検家スタイン（Sir Aurel Stein）も、後にイギリスに帰化したものの、実はハンガリーの出身である。またモンゴル研究で知られるリゲティ（Louis Ligeti, 1902-1987）もELTEで教鞭を取っていた。このよ

うに歴史的背景のもとでELTEでは戦前から東洋学学科が設立され、アジア諸国の言語や文化が教えられている。その一環として日本語・日本文化の研究や授業も多く行われている。また仏教研究にも力を注ぎ、インド・チベット・中国・日本などの仏教を総合的に研究する修士課程を新設する計画も進められていて、東欧における仏教研究の中核センターとなるべく語学教育・関連図書館施設などの拡充が図られている。

現在ELTEの仏教学研究の伝統を引き継いでいるのはハマル教授である。教授の専門は中国仏教、特に華嚴思想である。教授は多くの業績を発表されているが、そのなかでも二〇〇二年に出版された *Religious Leader in the Tang: Chengguan's Biography* (『唐時代の宗教的指導者—澄観の伝記』) は特筆すべきものである。これは唐時代に活躍した華嚴宗第四祖の清涼大師澄観(七三八〜八三九)の詳細な伝記研究であり、東京の国際仏教学大学院大学のモノグラフシリーズ *Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series* の第十二冊目として出版されている。また二〇〇四にはELTEで華嚴思想に関する国際会議を開催し、二〇〇七にはその成果を *Reflecting Mirrors: Perspectives on Hukuan Buddhism* (『照らし合う鏡—華嚴仏教の展望』) と題した論文集に編集し、ドイツのハラソウィツ(Harrassowitz) から出版している。

二〇〇五年からハンガリーもアメリカ的教育システムを模範としたいわゆるポーロニヤ・システムを導入し、大学教育の全面的改革に踏み切った。そのため従来の研究中心であった高等教育システムをアメリカ流の学士(BA)・修士(MA)・博士(PhD)の各過程に再編成し、特に学士過程では教育目標を研究者養成から幅広い知識の習得へと大胆にシフトした。そのような背景のもと、以前は地域ごとに別れていた東洋研究は東アジア学科に統合された。この学科では日本・中国・韓国朝鮮・中央アジア(モンゴル・チベット)・ベトナムの各地域の文化と言語を学ぶことができ、副専攻(minor)として仏教学も選択することもできるようになっている。今回の集中講義の主たる受講生は、東アジア学科に所属し仏教学を副専攻とする学生たちであった。また新学士過程の完成年度を迎え、現在ELTEで

は日本学と中国学の新修士課程を申請中である。これらの新修士過程が認可され次第、仏教学の修士課程の設立に取り掛かることが計画されている。さらに二〇〇七年の一月には中国政府の支援を得て孔子学院がハマル教授を院長として東アジア学科に隣接して設立され、公開講演会を開催するなど活発な研究活動を行い、ELTEの東洋学の発展に大きく貢献していることも付け加えておきたい。

二

集中講義は英語で毎日二コマ（ハンガリーでは一コマは四十五分）、連続して行われた。他の授業と重ならないように、夜の六時から七時半までの時間帯で設定されていた。月曜日から金曜日まで2週間の講義を行う約束であったため、出発前には一時間半の講義を十回分用意していたが、ブダペスト到着後、三月十五日（月）は一八四八年革命を記念した祝日であり、また三月十九日（金）はハマル教授に招待され、ハンガリー随一の観光地であるバラトン湖地方を案内していただけることになったため、この両日の講義は休講となった。そのため最終的には八回の講義が行われた。

今行行った授業の内容は次の通りである。

第一回講義（三月八日） 「仏教伝来と聖徳太子」

第二回講義（三月九日） 「奈良時代の国家仏教」

第三回講義（三月十日） 「最澄と日本天台宗」

第四回講義（三月十一日） 「浄土教の伝来と源信の『往生要集』」

第五回講義（三月十二日） 「法然と親鸞」

第六回講義（三月十六日） 「明恵と『夢記』」

第七回講義（三月十七日） 「叡尊と戒律復興」

第八回講義（三月十八日） 「日蓮の生涯と思想」

講義には学部生から大学院生・教員まで約五十人が毎回出席し、熱心に聴講してくれた。授業が終わるといつも数人の学生が教室に残り、毎回多くの質問を受けることになった。ちなみに、授業中に数回学生にコメントを書いても良かったが、そのなかでどの授業に最も関心を持ったかと聞いたところ、特に浄土教に関心を持ったという、日本語で書かれた回答があったことは驚きであった。また授業の試験については、補助教員としてサポートしてくれた中国語講師のパップ・メリンダ (Pap Melinda) 講師が、学期末の試験期間に行ってくれることになった。ちなみに、パップ講師は中国天台を専門とする若き研究者である。長く中国に留学していた経験を持つため、流暢な中国を話し、現在、天台宗第六祖として知られる荊溪湛然の『金剛錍論』について博士論文を作成中である。ハンガリーの仏教研究を担う若い学者として期待されている。

三

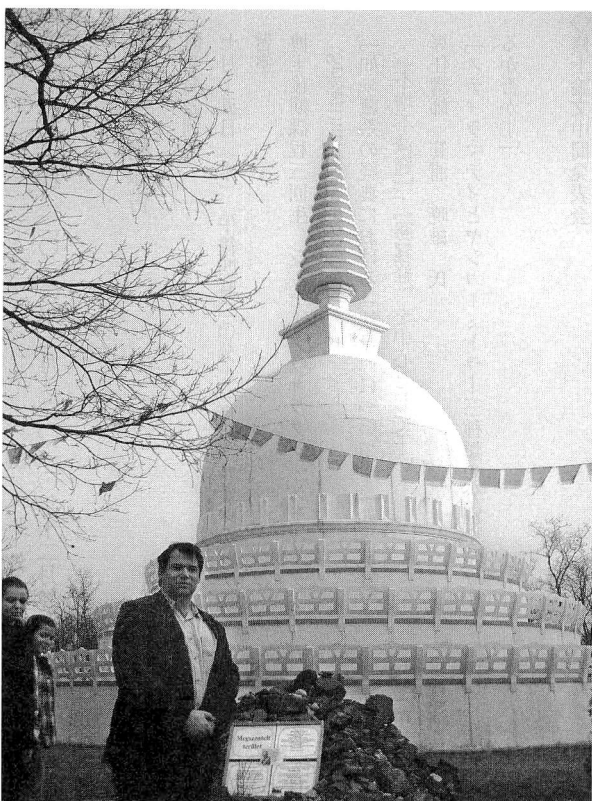
今回の滞在では、授業を行う以外にもすばらしい出会いがあり、心に残る多くの思い出を作ることができた。今回の集中講義ではELTEの多くの先生や学生にお世話になったが、そのなかでもハマル教授と山地教授には特に感謝をしなければならぬ。ハマル教授は私をELTEへ招聘してくださったばかりでなく、一日をかけてバラトン湖地方に案内してくださった。また山地教授には、週末ことにエルジェーベト皇妃の離宮がるグドウルーやハンガリー・カトリック総本山の大聖堂のあるエステルゴム、またはトルコ軍との戦いで有名な城下町エゲルや閑静な大学町のセゲドなど、ハンガリー各地の名所旧跡を案内していただいただけでなく、ご自宅で夕食にご招待してくださった。さらには資料のコピーなども含めて、さまざまな面で授業の補佐をしていただいたパップ講師にも深く感謝している。



ハマル教授と共に（ウェスブレードで）

今後も教員や学生の交換を含めて、ELTEと本学の交流が様々な形で発展してゆくことを期待する。

最後にハマル先生が案内してくださったバラトン湖観光の思い出を記して終わりたい。東西七十キロに延びるバラトン湖は、中央ヨーロッパ最大の湖で、ハンガリー随一のリゾート地として知られている。ブダペストを早朝に出発し、南東へ車で一時間半ほど走ると、まずバラトン湖の北西に位置するウェスブレードに到着した。ここはハンガリー王国にキリスト教をもたらしたイシュトヴァーン一世の妃ギゼラが即位したとされるところで、「妃の町」と呼ばれているが、ハマル先生が生まれ育ったところでもある。都市中心の丘に残る旧市街は、古い教会や司教の館が残り、嘗ての繁栄の姿を今に伝えている。ウェスブレードから少し南に下がると、すぐにバラトン湖が見えてきた。そのほぼ中央に突き出ている半島にあるティハニという小さな村で、十一世紀に建立されたベネディクト派の修道院を見学した。さらに湖畔を一時間ほどドライブすると、バラトン湖の南端にあるケストヘイという町に着いた。そこでは広大な庭園に囲まれたフェシュテティツチ宮殿があった。この宮殿は戦前まで、ハンガリーの名門貴族であるフェシュテティツチ家が所有し、戦後は国の管理下にあったため、保存状態は極めてよく、ヨーロッパ貴族の華やかな生活を想像させるに十分なものであ



ケストハイの仏塔（前に立つのはハマル教授）

った。特にそのなかに設けられていた広い図書室には、何千もの古い書物が収められていて、興味深かった。

しかし、この小旅行のハイライトは、その後にあった。ハマル先生もまだ見たことがない仏塔が、ケストハイ近郊にあるということ、そこを訪れることになった。町から北へ約二十分ほど、迷いながらも車を進めると、小高い丘の上に仏塔らしきものが、木々の間から見えてきた。麓の村から舗装されていない山道を登ると、三十メートルの高さを誇る巨大な白いチベット風の仏塔が眼に飛び込んできた。説明によると、この塔は一九九三年に建立され、なか

には韓国で作られた仏像が安置されているとのことであった。丘を降りて村にもどると、そこには二人のチベット僧が住む寺もあり、多くの人々が冥想を行うために訪れるとのことであった。仏教が様々な形で世界中に広がりつつあることを実感できたことも、今回の集中講義で得た貴重な成果であった。